

(2)シンポジウムの開催・運営(東京会場)

1)実施概要(東京会場)

「遊ぼう！学ぼう！福島の森と木の親子体験教室」

①目的

福島会場の目的に加え、東京会場は首都圏からの参加者であることを念頭に、シンポジウムを通して、特産林産物を含めた福島県産品の消費や福島県への観光といった面で福島の支援者となりうることを目指した。

このため、東京会場では福島県産品の販売コーナーを設け、シンポジウム会場で支援の第一歩の行動に移せるようにした。

②開催日時及び場所

日時：令和元年 12 月 21 日（土） 13:00～16:00（開場 12:15）

場所：東京都港区（品川シーズンテラスカンファレンス タワー棟 3 階 カンファレンス A B C、アネックス棟 3 階 ホール）

③募集方法

募集定員は親子 100 組 200 名とし、ポスター及びチラシを作成し、福島県出先事務所、福島県内の全市町村、森林組合、森林・林業関係団体森林管理署、高校・大学に加え、隣接する県や東京都内の森林・林業関係団体等、約 200 か所に配布・周知した。さらに、港区の協力を得て、港区内の全小学校 18 校に配布・周知した。また、子ども向けイベント情報サイト等、インターネット上で告知を行うとともに、子ども向け環境情報紙「エコチル」に告知記事を掲載した。申し込みはインターネット、電話、郵送及び F A X で受け付けた。

④プログラム

令和元年度 福島の森林・林業再生に向けたシンポジウム 東京会場プログラム 『遊ぼう！ 学ぼう！ 福島の森と木の体験教室』

日程：【東京会場】2019年12月21日（土）13:00～16:00
 場所：【東京会場】品川シーズ・テラスカンファレンス（東京都港区）
 主対象：親子連れ（小学校中学生以上を推奨）
 全体進行：フォレストパークあだたら 遠藤史貴氏

時間	13:00		14:00		14:25		14:55		15:55		16:00		
	12:15～	13:00	13:15	14:05	10分	10分	30分	60分 (30分+30分)	5分				
持ち時間	45分	15分	50分(質疑応答含め)	10分	10分	30分	60分 (30分+30分)	5分					
	<学びの部>												
内容	(要付)	撮影 主 講 説 明 「福島の森のハジけになろう！」 ※福島の森やきのこ等の放射線量の状況、放射線の基礎知識を含めた「安全・安心」のための情報提供 福島のど りくみ 港区のど りくみ										<遊びの部>	
												<体験の部>	
		【森のめぐみワークショップ】 ※来場者を半分ずつにし、①と②で講師を入れ替え、両方体験できるようにする。 ①木で作ろう 「クリスマスのオリジナルオーナメント」 ②収穫しよう 「しいたけ＆なめこの不思議」 森へのいざない アンケート 回収											
福島県産品販売コーナー													
登 壇 者 等	林野庁 福島県 港区	(対応者) (大) 鹿取大学 北 実氏 (国研) 森林研究・整備機構 森林総合研究所 荒木真岳氏	福島県 港区					(対応者) フォレストパークあだたら (安達郡大玉村)、福島県もりの案内人 (福島県) ②M&Aふぁーむ・わたなべ (三善町)、新木園園 (郡山市)	(対応者) フォレストパー クあだたら、福 島県もりの案内 人				

2)実施状況(東京会場)

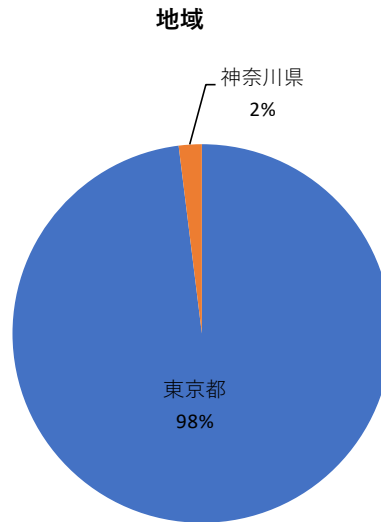
①参加者数(実績)

全 189 名 (一般申込者数 137 名 (子 74 名・保護者 63 名)、来賓 8 名、関係者・講演者・運営者数 44 名)

*一般申込者数 137 名の属性は下記の表、図の通り (性別と年齢層以外は保護者の属性)。

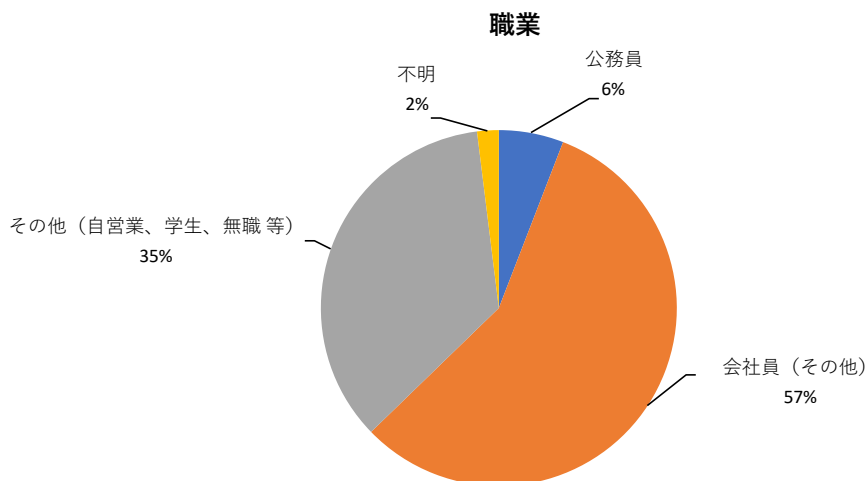
地域

東京都	50
神奈川県	1
	51



職業

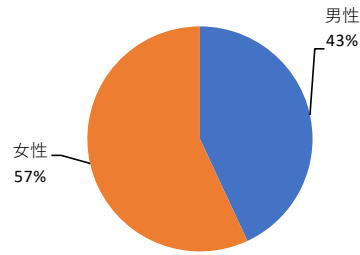
公務員	3
会社員 (その他)	29
その他 (自営業、学生、無職等)	18
不明	1
	51



性別

男性	59
女性	78
	137

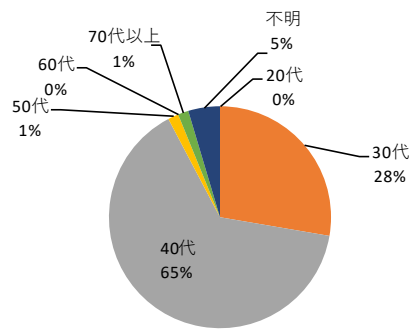
性別



年齢層

10代以下	72
20代	0
30代	18
40代	42
50代	1
60代	0
70代以上	1
不明	3
	137

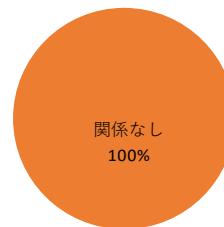
年齢層



福島の林業・地域の再生との関わり

関係あり	0
関係なし	51
	51

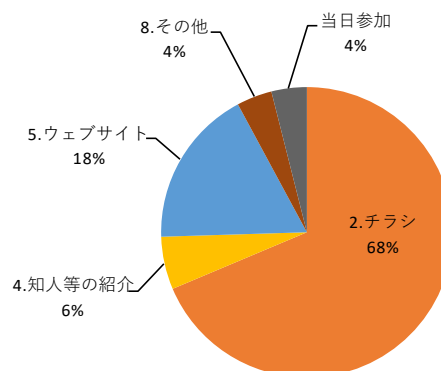
福島の林業・地域の再生との関わり



シンポジウムを知った媒体

1.ポスター	0
2.チラシ	35
3.行政の紹介	0
4.知人等の紹介	3
5.ウェブサイト	9
6.SNS (Facebook、Twitter 等)	0
7.メールマガジン	0
8.その他	2
当日参加	2
	51

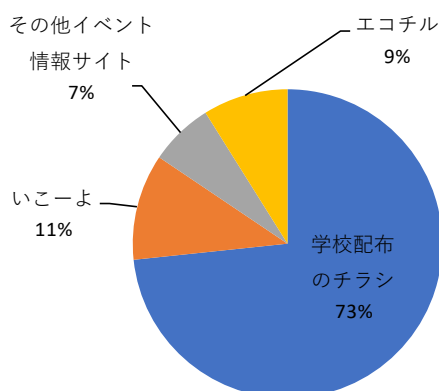
シンポジウムを知った媒体



シンポジウムを知った媒体【具体的な回答】

学校配布のチラシ	33
いこーよ	5
その他イベント情報サイト	3
エコチル	4
	45

シンポジウムを知った媒体【具体的な回答】



②発表等概要

34頁のプログラムに沿い、林野庁森林整備部長、港区環境リサイクル支援部地球温暖化対策担当課長、福島県農林水産部森林計画課長の挨拶後、各発表を行った。各発表後に参加者からの質疑に応答し、発表の補足を行った。発表の概要は以下の通りである。各発表後の質疑応答の概要は次項目に記載する。

学びの部「福島の森のハカセになろう！」

【講師】

北 実氏／(大)鳥取大学 研究推進機構研究基盤センター 放射線取扱主任者
 荒木眞岳氏／(国研)森林研究・整備機構 森林総合研究所 植物生態研究領域チーム長

【講義内容】

0. 福島の森とみんなとのかかわり、見てみよう！

1. 放射線ってどんなもの？ 怖いのか？ 怖くないのか？ 【北氏】

- ・放射線ってどこから出てくるのか？
- ・自然の中の放射線
- ・先生が、この会場の放射線の量、はかってみます！
- ・体の中に放射線が入ると？
- ・少しなら、傷ついた遺伝子も治せます
- ・風船に放射性物質は集まったかな？
- ・放射線って、どんなふうに見えるのか？
- ・放射線が飛ぶようす、見てみよう！

2. 福島の森、今どうなってるのか？ 【荒木氏】

- ・福島県全体をみると、放射線の量は、だんだん下がっていています。
- ・福島第一原子力発電所のすぐ近く以外は、放射線の量は、国内や海外の都市と、ほぼ同じくらいになっています。

- ・ 森の中の放射線の量は？
- ・ 福島県内のいろいろな森をしらべてみました。
- ・ 森の中にある、木、落ち葉、土のうち、どこで放射性物質は多いでしょう？
- ・ じっさいに、木材、落ち葉、土の放射線の量をはかって、たしかめてみよう！
- ・ 正解は、【土】でした
- ・ なんでそうなるのかな？
- ・ 放射性物質（セシウム）は土にくっつきやすい性質です。
- ・ 木の中の放射線の量は？
- ・ 「木材」の中の放射性物質の量は、葉・枝・樹皮に比べると、かなり低くなっています。
- ・ [ワンポイント]福島県の木材をつかっても大丈夫？
- ・ 森のめぐみ「キノコ」の放射線の量は？
- ・ 福島県では、キノコ・山菜の放射線量を検査しています。基準値をこえたものは、年々減ってきています。
- ・ [ワンポイント]野生のキノコを採っても大丈夫？

福島県の取組報告「ふくしまの森で行っていること」

【講師】

會田充茂氏／福島県 農林水産部 森林計画課 主幹

【講義内容】

1. 森から放射性物質を出さない手入れ
 - ・ 「ふくしま森林再生事業」について
 - ・ 放射性物質を森から出さないために、森の地面まで光が届くように木を伐る。間伐をする。
 - ・ 草が育つまで、土と一緒にになった放射性物質が流れないように木でできた柵を置いて、土が流れ出すのを防ぐ。
 - ・ この事業により森から放射性物質をださない森の手入れを行っている。
2. 販売されているキノコ・山菜は安全
 - ・ ふくしまの森でどんな食べ物が採れるかな？
 - ・ 食品中の放射性物質の基準値について
 - ・ 1.出荷前に検査のため収穫→2.細かくし、容器に詰める→3.分析装置にセット→4.分析を開始→リアルタイムで管理→結果を公表

港区の取組報告

【講師】

生駒憲一氏／港区 環境リサイクル支援部 環境課 地球温暖化対策担当係長

【講義内容】

- ・ 港区の特徴
- ・ 森のない港区で地球温暖化防止のために何ができるだろう？
- ・ 建物に木を使おう！～みなとモデル二酸化炭素固定認証制度～
- ・ 港区と連携している全国の自治体

- ・麻布図書館／スターバックスコーヒー ムスブ田町2階店／みなとパーク芝浦
- ・みなと森と水会議
森林の役割を知り、森林保全の大切さをかんがえる取り組み
- ・木をたくさん使って地球を守ろう！

遊びの部

- ・福島県産品販売
- ・森のひみつ探検ミニラリー
- ・福島県 PR 動画上映
- ・木のおもちゃで遊ぶ木育スペース
- ・キビタンと遊ぼう！

体験の部「森のめぐみワークショップ」

『木で作ろう～クリスマスのオリジナルオーナメント～』

【インストラクター】

遠藤史貴氏／フォレストパークあだたら

((公財)ふくしまフォレスト・エコ・ライフ財団 主査 利用促進担当)

小松雅喜氏・関根多恵子氏／福島県もりの案内人

【体験内容】

- ・材料に使われている木について、作り方の説明
- ・オーナメント制作

体験の部「森のめぐみワークショップ」

『収穫しよう～しいたけ&なめこの不思議～』

【インストラクター】

渡邊俊史氏／(有)M&Aふぁーむ・わたなべ 取締役

鈴木清美氏／(有)鈴木農園・(株)まどか菜園 代表取締役

【体験内容】

- ・キノコの育ち方、菌床について説明
- ・しいたけの収穫方法の説明
- ・なめこの収穫方法の説明
- ・収穫体験

森へのいざない

【インストラクター】

遠藤史貴氏／フォレストパークあだたら

((公財)ふくしまフォレスト・エコ・ライフ財団 主査 利用促進担当)

小松雅喜氏／福島県もりの案内人

【内容】

- ・フォレストパークあだたらで体験できる森遊び等の紹介
- ・シンポジウム全体の総括

③質疑応答概要

質 問	回 答
学びの部「福島の森のハカセになろう！」	
土の中にある放射性物質は、ずっと留まり続けていくのか。	<p>・放射線物質は土の中にはずっとある。それは掘ってどこかへ持っていったり、土砂崩れで流れていかなければそこにずっと留まり続ける。しかし、その放射性物質から出てくる放射線の量・強さというのは年々だんだんと弱くなっていく。難しい言葉でそれを半減期と言うが、セシウム 137 の場合であれば、30 年程度で放出される放射線の量は半分になる。</p> <p>・実験で風船についてこの部屋の中の放射線の量は 40 分～50 分程度で半分になる。だんだん減っていくが、代わりにコンクリートの中や自然の中からも放射線が出てくるので、部屋の中の放射線量は変わらない。しかし、福島の森と土の中についている放射性物質は原発事故のときに多く出てきたものが付着したので、大体 30 年程度で半分になる。そうしてどんどん減っていき、300 年くらいしたらほとんど分からないくらいになる。</p>
放射線量を調べる機械は誰が発明したのか。	サーベイメーターの発明者は分かりかねるが、放射線が飛んでいる様子を観察した霧箱はウィルソンという人物が発明した。一番最初に放射線がこの世の中にあると気づいた人物はレントゲンで、どのようにして放射線があるか気づいたかと言うと、放射線が当たると光る物質があるということに気づいた。そのことにより放射線があるかどうかを調べた最初の人物はベクレルだ。まだ他にもいろいろな機械がある。
なぜ放射線という名前なのか。	「吹き出してくるもの、放射されるもの」という意味で「放射線」という呼び名が付けられた。はっきり分からないものは X という記号で表されるが、何かよく分からない出てくる放射線ということで「X 線」と呼ばれたのが最初だ。
放射性物質が付着したものを食べるとどうなるのか。	どこにでも放射線や放射性物質があるという話をしたが、普段自然の中にある程度の放射線が出ているものを食べて私たちの体に気づかないところで遺伝子に傷がつくことはあっても、それがまた気づかないうちに治り、特に変化はない。ただし、ものすごくたくさんの量の放射線が出ているものを食べたりして、自然に治らないくらいの放射線があたってしまうと病気になるおそれがある。
福島のシイタケは食べられるのか。	ちゃんと食べられるので、安心して食べてほしい。
福島にはどれくらいキノコがあるのか。	福島で作ってお店で売っているキノコの種類が何種類くらいあるかで答えると、およそ 6 種類だ。体験の部のインスト

	<p>ラクターはナメコ・シイタケを作っているし、それ以外にもエリンギを作っている人、マイタケを作っている人、エノキを作っている人もおり、今挙げただけでも5種類ある。自社ではハナビラタケという変わったキノコを作って出荷していたこともあるし、畑をやっている生産者もいる。一般的にみなさんがスーパーで見ているようなキノコ類の6種類は最低限作っているとして、その他にもマニアックなキノコを作っている生産者もいる。</p>
<p>冬虫夏草について、どんな虫でもキノコは生えるのか。</p>	<p>キノコは自分で光を受けて栄養を作れない。そのため何かから栄養をもらわなければならないのはどのキノコも一緒に、マツタケは他の木の根っこから栄養をもらっているし、シイタケやナメコは木材を分解してそこから栄養をもらって生えている。冬虫夏草は虫から栄養を摂って育つタイプのキノコだ。どんな虫でも生えるかということと正確には分かりかねるが、生えてもおかしくはない。いろいろな虫に取り付くのは確かで、生えるキノコ自体についてもたくさんの種類があるそうだ。</p>
<p>虫の死骸からキノコが生えてくるが、例えば虫以外の動物の死骸からでもキノコは生えるのか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・出てきてもおかしくないと思うが、動物の死骸からキノコが生えてくるというのは見たことがないし、ほとんど聞いたことがない。 ・例えばマッシュルームの作り方として馬糞を木の欠片に混ぜて使ったりする。いろいろな可能性があるのですが、動物の死骸から生えないとは言い切れない。 ・面白い質問なので、ぜひ答えを発見して第一発見者になってもらいたい。
<p>体験の部「森のめぐみワークショップ 収穫しよう～しいたけ&なめこの不思議～」</p>	
<p>菌床は密閉して空気が入らない状態にしているのか。</p>	<p>その通り、シイタケの菌床の袋は密閉している。例えここに一欠片でも異物が入ったらダメになる。通常はだんだん菌床が白くなっていくのが正解だが、少し針で刺しただけでも緑や黄色が現出した場合は雑菌混入となり、シイタケが生えない。それくらいデリケートだ。</p>
<p>キノコは呼吸はしないのか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・呼吸はしている。シイタケ菌床が入っている袋の正面にフィルターがついてる。ここから人間と同じように酸素を吸って二酸化炭素を吐く。もしこれがなくなったら人間と同じで窒息死する。呼吸はしているが、余計な雑菌等が入らないように育てる。 ・ナメコも同じだ。蓋の裏手に少し空気が入るところとして間にフィルターが入っている。それで余計な雑菌等をある程度防いでいる。種を植えた直後に余計な菌が入ると、菌の戦

	いになってしまうので、菌床が白ではなく抹茶色のまま育ったこともある。
菌床のフィルターは一般の店で売っているのか。	シイタケ栽培専用の袋を使っており、呼吸面が特殊なもので一般の店では見かけない。
ナメコは菌床栽培と原木栽培だと味が違うのか。	多少違う。一般的に原木栽培といわれるナメコはきちんと採れるようになるまでに種を植えてから3年かかる。菌床栽培は60日から自社のように90日かけるところもある。じっくりキノコを育てることで風味や香りが違ってくる。ナメコは味が強いわけではないが、ちょっとした雑味や酸味にすごく差が出る。人間と同じように体づくりをいかに大事にするかという考えで、栽培日数をコントロールしている。味というよりは風味の部分が多いかもしれない。あとは使う原料などでも違いが出てくる。
ナメコはなぜぬるぬるしているのか。	ナメコは収穫したときなどにぬめりを内側から出す。このぬめりは、私たち人間の体を守るのにも使え、みんなの目や喉、胃の粘膜と一緒に。ナメコを食べることでそういった粘膜を保護してくれるので、風邪や今の時期だとインフルエンザにもなりにくくなると思う。夏は逆に水物が多く、胃の粘膜が薄められて夏バテに繋がってしまうが、蕎麦にキノコ類を入れたりすると、夏バテ防止になると思う。 (補足：ナメコ健康への影響・効果等は現在研究中で、明らかになっていない)
ナメコは一つの瓶にどれくらいの本数が生えるのか。	今日収穫した瓶からだとも150～200g分くらいは採れる。スーパーで売っているナメコが一袋100gなので、それが1～2袋分くらいは収穫できる。
ナメコの瓶は工場にいくつあるのか。	自社には工場が2つあり、1つの工場におよそ80万本あるので2工場合わせて160万本だ。それが年間で二回転半くらいするので、年間300万本ほど使っている。
ナメコの収穫方法を聞きたい。	自社では今日参加者全員にやってもらった株取りという収穫の仕方をするが、日によってはハサミで切ったり、機械でスパッと綺麗に切ったり、いろいろな方法で収穫をしている。収穫の仕方によって四国や北海道などいろいろな所に届けられるので、工夫をして収穫している。
なぜ2回目に収穫するナメコは1回目より大きくなるのか。	全てが大きくなるわけではない。収穫した後の白くなっている部分がキノコの菌の表面だが、ここから最初に出てくる芽の数が多いか少ないかによって差が出てくる。ここを削ってあげたりすると、間引きのような感じで大きくなる。

なぜナメコという名前になったのか。	ナメコは漢字で書くと「滑る子ども」で「滑子」と書く。字のごとく、普段お味噌汁に使う時などぬるぬるするのでそこから来ているのかなと思う。
キノコは太陽に当てる方がよいのか、当てない方がよいのか。	<ul style="list-style-type: none"> ・シイタケは太陽光に当てた場合、品質劣化が著しいので、当てないようにしてほしい。 ・ナメコも同じだ。基本的には野菜であり、キノコは森の中で育っているため、直射日光はほとんど当たらない。光を当てるにしても薄暗い、部屋の中の光などで十分だ。
家でナメコを栽培する方法について聞きたい。	先ほど収穫した時に、瓶の表面にも古いナメコが残っているようであれば一度それを綺麗にする。そういったものはカビや雑菌の元になるので、その部分を綺麗にしてから、配布した育て方ペーパーに則って、保護者に教えてもらいながら栽培してほしい。
ナメコは一日に何回ぐらい水をあげればよいのか。	育て方ペーパーに書いてあるように、初日に水を一回あげて、ナメコの芽が出てきたら、部屋の乾燥具合にもよるが、出来れば朝と夕方にあげてほしい。芽が出てきたら、乾かないように軽くフィルムを掛けながら、朝と夕方に水をあげれば、乾かないと思う。
キノコは冷凍できるのか。	<ul style="list-style-type: none"> ・シイタケは冷凍できる。通常3日～4日でシイタケは痛むが、冷凍すればかなり長い時間持つのでぜひやってみてほしい。 ・ナメコも冷凍は出来るが、解凍はしないでほしい。解凍すると黒ずんでしまったりするので、冷凍したままお湯などに入れて、味噌汁にしてもらえれば大丈夫だ。
キノコの美味しい食べ方を教えてほしい。	(福島会場「ナメコはどんな料理が一番美味しいか」と同回答)

④記録写真



挨拶：小坂善太郎 林野庁森林整備部長



挨拶：大久保光正 港区環境リサイクル
支援部地球温暖化対策担当課長



挨拶：會田充茂 福島県森林計画課主幹
(丹治俊宏 福島県農林水産部
森林計画課長 代読)



学びの部「福島の森のハカセになろう！」
(大)鳥取大学 研究推進機構研究基盤
センター 放射線取扱主任者
北 実 氏



学びの部「福島の森のハカセになろう！」
(国研)森林研究・整備機構 森林総合研究所
荒木眞岳 氏



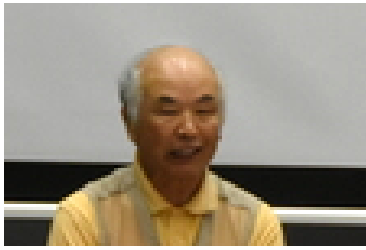
学びの部「福島県の取組報告」
福島県森林計画課主幹
會田充茂 氏



学びの部「港区の取組報告」
港区環境リサイクル支援部環境課
地球温暖化対策担当係長
生駒憲一 氏



体験の部「木で作ろう」・「森へのいざない」
フォレストパークあだたら
((公財)ふくしまフォレスト・エコ・ライフ財団)
遠藤史貴 氏



体験の部「木で作ろう」・「森へのいざない」
 福島県もりの案内人
 小松雅喜 氏



体験の部「木で作ろう」
 福島県もりの案内人
 関根多恵子 氏



体験の部「収穫しよう」(シイタケ担当)
 (有)M&Aふぁーむ・わたなべ
 渡邊俊史 氏



体験の部「収穫しよう」(ナメコ担当)
 (有)鈴木農園／(株)まどか菜園
 鈴木清美 氏



会場の様子 (学びの部)



会場の様子
 (遊びの部：福島県産品販売)



会場の様子
 (遊びの部：森のひみつ探検ミニラリー)



会場の様子
 (遊びの部：木育スペース)



会場の様子
 (遊びの部：キビタンと遊ぼう！)



会場の様子
 (学びの部で実験に使用した霧箱の展示)



会場の様子（体験の部：木工）



会場の様子（体験の部：キノコ収穫）

3)参加者アンケート集計結果(東京会場)

アンケートの集計に当たっては、一般市民等の興味や関心を調べることで、シンポジウムのあり方や、イベント告知等の効果的な広報を検討することを目的とした。

○回答者数及び属性

地域	区分	回答数	地域	区分	回答数
港区	幼稚園・保育園	1	東京都 (港区を除く)	幼稚園・保育園	4
	小学生	27		小学生	19
	会社員・団体職員 (森林・林業関係以外)	14		会社員・団体職員 (森林・林業関係以外)	6
	その他(自営業、学生、 無職、不明等)	9		その他(自営業、学生、 無職、不明等)	7
	公務員	2			
地域	区分	回答数			
その他 (神奈川県、不明)	幼稚園・保育園	2			
	小学生・中学生	2			
	会社員・団体職員 (森林・林業関係以外)	1			
	その他(自営業、学生、 無職、不明等)	1			

○回収率 69.3% (95/137名)

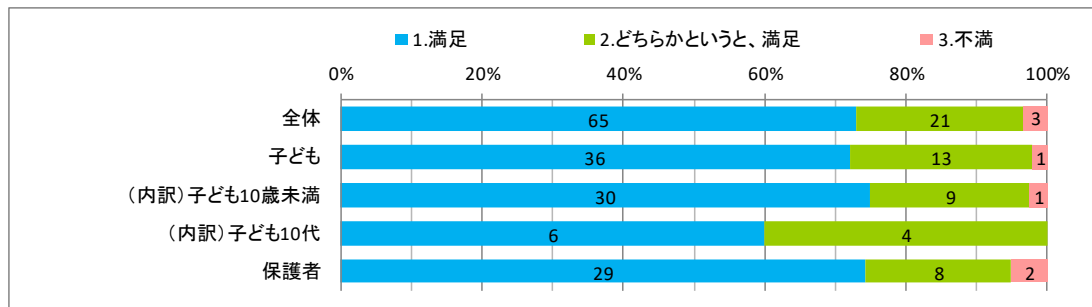
○集計結果

(1) シンポジウムの感想を教えてください

①学びの部「福島の子のハカセになろう！」

<年代別>

回答者属性▼	← →			回答数
	高 1.満足	2.どちらかとい うと、満足	低 3.不満	
全体	65	21	3	89
子ども	36	13	1	50
(内訳) 子ども10歳未満	30	9	1	40
(内訳) 子ども10代	6	4	0	10
保護者	29	8	2	39



▼主な評価の高いコメント

【子ども】

- ・放射線のことが学べ、動き方も知れた
- ・グラフや実験をしたり説明が分かりやすかった
- ・知らなかった色々なことが学べて良かった

【保護者】

- ・子どもにも分かりやすい説明だった

▼主な評価の低いコメント

【子ども】

- ・難しかった

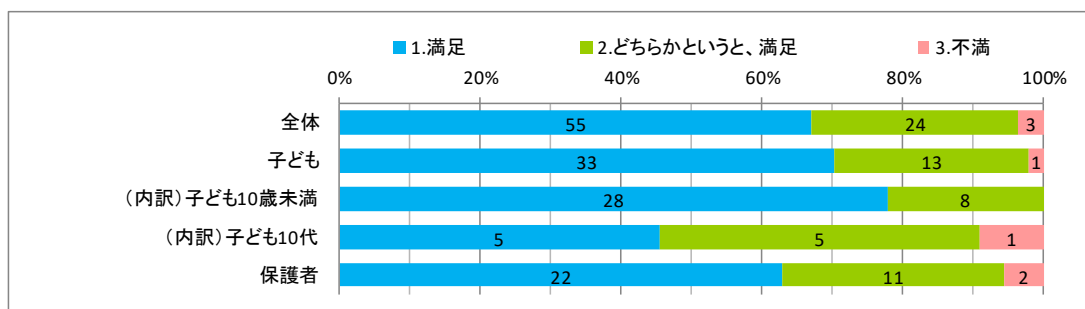
【保護者】

- ・時間が長く子どもにとっては退屈だと思う

②遊びの部

<年代別>

回答者属性▼	高	← →	低	回答数
	1.満足	2.どちらかという、満足	3.不満	
全体	55	24	3	82
子ども	33	13	1	47
(内訳) 子ども10歳未満	28	8	0	36
(内訳) 子ども10代	5	5	1	11
保護者	22	11	2	35



▼主な評価の高いコメント

【子ども】

- ・ 森のひみつ探検ミニラリーが楽しかった
- ・ 面白い木のおもちゃがいっぱいあった

【保護者】

- ・ クイズ形式で知識が得られた

▼主な評価の低いコメント

【子ども】

- ・ 混雑していてあまり遊べなかった

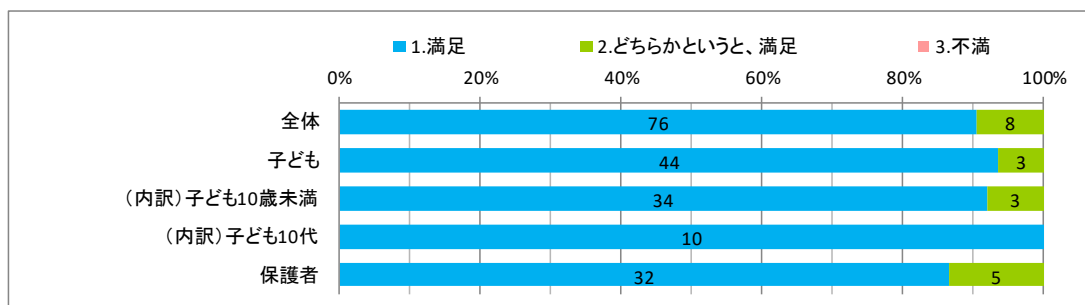
【保護者】

- ・ スペースが狭い

③体験の部「木で作ろう～クリスマスのオリジナルオーナメント～」

<年代別>

回答者属性▼	高	← →	低	回答数
	1.満足	2.どちらかという、満足	3.不満	
全体	76	8	0	84
子ども	44	3	0	47
(内訳) 子ども10歳未満	34	3	0	37
(内訳) 子ども10代	10	0	0	10
保護者	32	5	0	37



▼主な評価の高いコメント

【子ども】

- ・ 木で作るのが楽しかった
- ・ 木の種類の違いを楽しく理解した

【保護者】

- ・ 木を使った工作は東京ではなかなかできないので楽しかった

▼主な評価の低いコメント

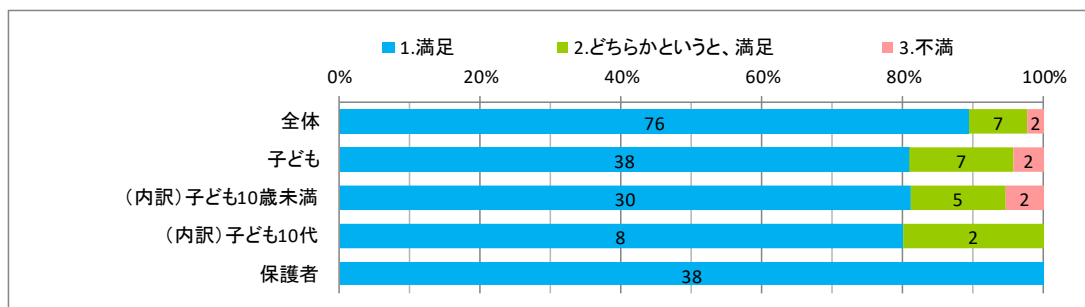
【保護者】

- ・ もっと時間があれば良かった

④体験の部「収穫しよう～しいたけ&なめこの不思議～」

<年代別>

回答者属性▼	← →			回答数
	高 1.満足	2.どちらかという と、満足	低 3.不満	
全体	76	7	2	85
子ども	38	7	2	47
(内訳) 子ども10歳未満	30	5	2	37
(内訳) 子ども10代	8	2	0	10
保護者	38	0	0	38



▼主な評価の高いコメント

【子ども】

- ・ とても楽しかった。家でも育てられるところがすごく良い
- ・ シイタケが好きだし、ナメコを収穫したことがないので良い体験になった

【保護者】

- ・ 大人も楽しめた。食育としても貴重な体験だった

▼主な評価の低いコメント

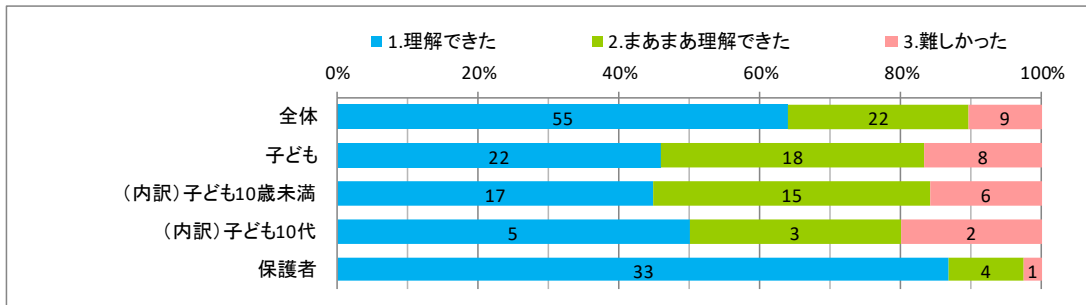
【子ども】

- ・ はさみで手を切りそうになった

(2) 福島の森の中の放射線量はだんだんと下がっていることや、キノコは今でもお店に出せない場所があるなどのお話は理解できましたか

<年代別>

回答者属性▼	高 ← → 低			回答数
	1.理解できた 2.まあまあ理解できた 3.難しかった			
	解できた			
全体	55	22	9	86
子ども	22	18	8	48
(内訳) 子ども10歳未満	17	15	6	38
(内訳) 子ども10代	5	3	2	10
保護者	33	4	1	38



▼主な評価の高いコメント

【子ども】

- ・ 図や写真と一緒にの説明で分かりやすかった
- ・ 色々なことが分かって良かった
- ・ 細かい検査をしていることがよく分かった

【保護者】

- ・ 安全性がよく伝わってきた

▼主な評価の低いコメント

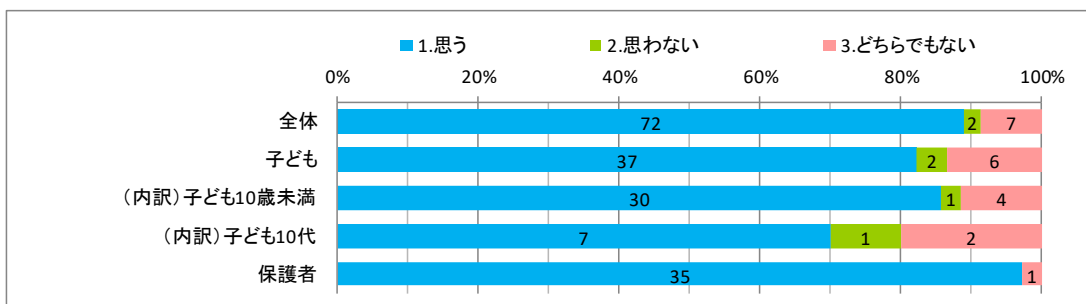
【子ども】

- ・ 難しい話でよく分からなかった

(3) 福島の食べ物（キノコなど）を食べたい、森に遊びに行ってみたいなど、福島県を応援する気持ちになりましたか

<年代別>

回答者属性▼	高 ← → 低			回答数
	1.思う 2.思わない 3.どちらでもない			
	ない			
全体	72	2	7	81
子ども	37	2	6	45
(内訳) 子ども10歳未満	30	1	4	35
(内訳) 子ども10代	7	1	2	10
保護者	35	0	1	36



(4) その他、感想などを自由に書いてください

【子ども】

- ・ 福島の食べ物などを食べたりしたい。すごく面白かった
- ・ キノコの収穫がとても楽しかった
- ・ 森に遊びに行ってみたいと思った
- ・ 福島のことが分かった
- ・ もう1回このようなイベントに来てみたい／また体験をやりたい

【保護者】

- ・ 親子で楽しめた
- ・ まだ不安に思うことがあったが、今日を機会にもっと福島に出かけてみたくなった
- ・ 「ワンチーム」で福島県を応援していきたいと感じた
- ・ 福島の魅力が伝わった
- ・ 森に関する話、キノコ収穫、オーナメントづくり、おみやげ等、充実した内容でうれしかった
- ・ よく子供向けイベントに参加しているが、時間も長く充実した内容でかなり満足度が高かった。もっとこのような機会が増え、たくさんの人に福島の良さを伝えられたらよいと思う
- ・ 今後も同様のイベントが開催されるのを楽しみにしている

4)参加者アンケート集計考察(東京会場)

アンケートは、今後、シンポジウム等の普及啓発手法の検討、運営等に役立てることを目的に実施した。主に各コマ（以降、講義や体験の単位として使用）の満足度等に対する評価について、集計結果の考察を行った。

回答者全体の傾向に加え、子どもと保護者に分け、さらに子どもは10歳未満と10代の年代別に分けて傾向の違いがみえるものについて結果を考察した。

参考までに、回答者の主な属性（職業）は、【子ども】港区内の小学生28%、東京都内（港区を除く）の小学生20%、【保護者】港区内の会社員・団体職員（森林・林業関係以外）15%、港区内のその他（自営業、学生、無職、不明等）が9%となった。

①シンポジウムの内容に対する満足度

満足度は、1（満足）、2（どちらかという満足）、3（不満）の3段階で評価を実施した。

ア 回答者全体の傾向

各コマの1と2の割合は、学びの部「福島の森のハカセになろう！」97%、遊びの部96%、体験の部「木で作ろう～クリスマスのオリジナルオーナメント～」100%、体験の部「収穫しよう～しいたけ&なめこの不思議～」98%、と全てのコマが95%以上となり、非常に満足度は高かった。とりわけ、体験の部（木工）は福島会場同様、全員が「満足」または「どちらかという満足」という非常に高い結果となった。

学びの部は、「放射線のことを学べ、動き方も知れた（子）」「グラフや実験をしたり説明が分かりやすかった（子）」「子どもにも分かりやすい説明だった（保護者）」との高い評価が寄せられた一方、低い評価の意見として「時間が長く子どもにとっては退屈だと思う（保護者）」といった、講義時間に関するコメントがあった。

遊びの部は、「森のひみつ探検ミニラリーが楽しかった（子）」「クイズ形式で知識が得られた（保護者）」「面白い木のおもちゃがいっぱいあった（子）」など、福島会場と同様にクイズラリーと木育コーナーが楽しめたという意見が多数あった。一方で、「混雑してい

てあまり遊べなかった（子）」「スペースが狭い（保護者）」として、十分に楽しめなかったという指摘があった。

体験の部（木工）は、「木の種類の違いを楽しく理解した（子）」「木を使った工作は東京ではなかなかできないので楽しかった（保護者）」とのコメントが寄せられ、都市部で普段触れる機会の少ない木についての話や木材を使った工作が良かったと高く評価された。また福島会場同様、要望として「もっと時間があれば良かった（保護者）」という意見があった。

体験の部（キノコ収穫）は、「シイタケが好きだし、ナメコを収穫したことがないので良い体験になった（子）」「とても楽しかった。家でも育てられるところがすごく良い（子）」「大人も楽しめた。食育としても貴重な体験だった（保護者）」といった、経験したことのないキノコ収穫や、持ち帰ってナメコが栽培できることが貴重な体験だというコメントが多数寄せられた。

イ 年代別の傾向

年代別に満足度の高低をみると、学びの部は福島会場同様に1と2の回答が10代100%、10歳未満98%で、10代の3の回答はなかった。保護者が「子ども向けとしては時間が長い」として不満と回答した割合が若干多く、東京会場でのみ実施した福島県・港区の取組報告により学びの部の時間が20分長かったことが要因と考えられる。

遊びの部は、1と回答した割合が、10代45%に対し10歳未満は78%で、福島会場同様に低年齢は楽しめたが、10代以上向けの内容ではなかったことがうかがえる。

体験の部（木工）は、1の回答が10代100%、10歳未満92%で、10代の満足度の方が高く、福島会場とは異なり、10代の満足度の方が高い結果となった。制作内容は両会場同じであるものの、都市部の子どもは木工を経験する機会が少なく、新鮮な体験だったことが高評価に繋がったと推察される。

体験の部（キノコ収穫）は、どの年代も満足度が高く、年齢層による差はみられなかった。10歳未満に3の回答が見られたが、年齢的に収穫に使用するはさみを上手く扱えない等の理由によるものだった。

保護者は、1と2の回答が、学びの部95%、遊びの部94%、体験の部（木工）100%、体験の部（キノコ収穫）100%、森林中の放射線量やキノコ出荷制限についての理解度97%で、福島会場同様にいずれも高い満足度・理解度だった。また、福島を応援したい気持ちになったかについても97%が思うと回答した。

②福島の森の中の放射線量はだんだんと下がっていることや、キノコは今でもお店に出せない場所があること等は理解できたか

ア 回答者全体の傾向

1（理解できた）と2（まあまあ理解できた）の回答で90%と理解度は高く、学びの部について「図や写真と一緒に説明で分かりやすかった（子）」「細かい検査をしていることがよく分かった（子）」「安全性がよく伝わってきた（保護者）」というコメントがあった。一方で、「難しい話でよく分からなかった（子）」という意見もあり、対象年齢の周知徹底と内容の設定に改善の余地があると考えられる。

イ 年代別の傾向

年代別に理解度をみると、1の回答は10代50%、10歳未満45%で若干10代が高いものの、年代別の大きな差はみられなかった。福島会場の子どもよりも理解度は大きく下がった。

③福島の食べ物(キノコなど)を食べたい、森に遊びに行ってみたいなど、福島県を応援する気持ちになったか

ア 回答者全体の傾向

1（思う）の回答が89%で、約9割が応援したいと回答した。

イ 年代別の傾向

1の回答が10歳未満86%、10代70%で、10代がやや低い結果となったが、いずれの年代もアンケートのコメント等から、2（応援したくない）、3（どちらでもない）とした理由は見えなかった。

④その他の感想・意見

「福島のこと分かった（子）」「キノコの収穫がとても楽しかった（子）」「もう1回このようなイベントに来てみたい／また体験をやりたい（子）」「森に関する話、キノコ収穫、オーナメントづくり、おみやげ等、充実した内容でうれしかった（保護者）」など、シンポジウムの内容に関する意見が多く寄せられたほか、「福島を食べ物などを食べたりしたい。すごく面白かった（子）」「森に遊びに行ってみたいと思った（子）」「まだ不安に思うことがあったが、今日を機会にもっと福島に出かけてみたくなった（保護者）」といった、福島を応援する気持ちの変化、家族でキャンプへ行こうと思う等の具体的な行動を記すコメントが多数あり、本シンポジウムが次の行動に繋がるきっかけとなったことがうかがえた。

5)企画・運営改善(東京会場)

準備段階から当日までの企画・運営等について、実施状況、シンポジウム実施後のミーティング（参加者アンケート回覧の上意見出しを行うもの）等から、成果、問題点、改善方法案を取りまとめた。なお、福島会場と同様の問題点や改善方法案は記載していない。

①準備作業

		成 果	
開催日の設定・検討	問題点	改善方法案	
	福島会場と東京会場の開催日との間を空けすぎない方が望ましいため、福島会場の日程の調整を待っての確定となったことで、条件の良い会場を確保できなかった。	引き続き福島県庁及び開催市と密に連絡・調整を行い、可能な限り早く日程を決め、会場を確保する。	
選定・検討の開催会場の	成 果		
	福島会場の問題点に記載した通り、他行事との調整により会場確保のタイミングが遅れたが、多くの路線が通る最寄りの品川駅からから徒歩6分というアクセスの良い会場が確保できた。		

	問題点	改善方法案
	具体的な選定時点で条件の良い会場は埋まっており、また、選定した会場の使用可能日が「福島フェスタ」と同日で、やむを得ず同日開催となった。また、広さの関係上、遊びの部・体験の部を二部屋に分けることとなった。	開催日の設定同様、可能な限り早く日程を決め、会場を確保する。
選定・調整 登壇候補者の	成 果	
	※福島会場参照	
	問題点	改善方法案
	※福島会場参照	※福島会場参照
広報対応	成 果	
	福島会場同様に広報手法の改善・拡充等を行った。東京会場の特筆すべき増員に繋がったと考えられる方法としては以下が挙げられる。 *子ども環境情報誌「エコチル」への記事掲載：事前告知が掲載され、配布区内の小中学校に情報が行き渡った（媒体別の9%）。	
	問題点	改善方法案
	当日の取材が、林業関連の専門誌のみだった。	本事業の普及効果をさらに高めるために、広く一般向けのメディアに取り上げてもらうことも重要である。一般のメディアに取材してもらえるようなプログラム内容を検討・実施するなど、引き続き広報に取り組んでいく。
プログラム の企画内容・ 時間設定・ 配付資料	成 果	
	※福島会場参照	
	問題点	改善方法案
	福島県と港区の取組報告を行ったことで学びの部が85分と長時間になり、子どもの集中力の持続が難しい時間設定となった。	コマごとの時間は対象年齢に合わせた適切な時間に設定する。

②シンポジウム当日の対応

会場設備・準備物等	成 果	
	1フロア全てが当シンポジウムの使用だったため、音量や共有スペースの使用に自由がきいた。	
	問題点	改善方法案
	会場の広さの都合上、学びの部はシアター形式、体験の部はアイランド形式とレイアウト変更をする必要があった。	レイアウト変更に要する時間・人員・手間を考えると、冒頭からアイランド形式で行う方が望ましい。適切な会場を選定する。
	遊びの部以降会場が2部屋に分かれ、そのうち一部屋が別棟だったことで、スタッフ・講師陣含め、移動や次の準備がタイトだった。	一部屋で参加者数が収容可能な広さの会場を選定する。
学びの部の運営状況	成 果	
	<ul style="list-style-type: none"> ・真面目で固い内容が続くコマだったが、子どもから質問が多く出たことは興味を持って聞いていたことの表れであり、会場の雰囲気づくりが上手くできており、その上で進行がなされた結果だった。 ・福島県の取組報告が、伝えたいポイントを2つに絞って明確に提示しており非常に分かりやすく、専門的なことも上手く伝えられていた。 ・県や区の取組を子ども向けに伝える機会は少なく、本シンポジウムで実施できたことは良かった。 	
	問題点	改善方法案
	霧箱の運用が初めてということもあり、準備、本番直前までのセッティング等に手間取った。	余裕を持ったスタッフを配置する必要がある。
	霧箱の準備を廊下で行っていたところ、通りかかった子どもがドライアイスに手を伸ばすことがあった。	可能な限り来場者に見えない場所で準備する。
遊びの部の運営状況	成 果	
	福島県産品販売は、来場者記念品引換券の配布枚数を上回る売上があり、多くの来場者が積極的に商品を購入する様子がみられた。	
	問題点	改善方法案
	事前募集時点で集まっていた220名全員が来場していたら、会場が手狭になっていた。	想定人数よりも余裕のある広さの会場を選定する。

	福島県産品の販売コーナーが混雑し、渋滞が起こった。要因は、日本橋ふくしま館M I D E T T Eの外部スタッフとの事前打合せが綿密にできず、当日に内部スタッフとの打合せがあまりできないまま販売時間となった。	詳細に情報提供するなど連絡は行ったが、先方の業務状況からこちらの意図する手法等を事前に把握し合わせることは難しいとの判断のため、販売手法・指揮系統は外部スタッフに一任し、内部スタッフは補助に徹する方が望ましい。
	想定よりも各人が購入する点数が多く、購入者が不便な様子だった。	買い物かご等の準備を検討する。
	販売コーナーに、遊びの部終了5分前でも並んでいる来場者がおり、その対応に当たったスタッフが体験の部の冒頭の対応に間に合わなかった。また、体験の部の冒頭に遅刻したため、他の参加者が集中しにくい状況となった。	参加者が余裕を持って販売コーナーで購入できるような時間設定とする。遊びの部のアナウンス時に、マイク等を使って繰り返し来場者にアナウンスする。
体験の部の運営状況	成 果	
	<ul style="list-style-type: none"> ・木工体験もキノコ収穫も参加者の反応が大変良く、福島会場と比較すると都市部の子どもはより自然のものに興味を持っている様子が見て取れた。 ・アンケート結果より「福島のキノコが安全だということが分かった」とのコメントが多数あり、また、「森へのいざないでフォレストパークあだたらのPRがあったが大事だと思う」というコメントもあり、参加者の反応が本シンポジウムの主旨に合致しており、目的が達成された結果といえる。 	
	問題点	改善方法案
	会場が2部屋に分かれたこともあり、各体験30分の時間設定では福島会場よりも駆け足になった（運営側の感想。参加者からはマイナス意見は無し）。	時間を長くする、開始時刻を遅くする等、余裕を持った時間設定をする。
想定よりも左利き用ハサミを使う来場者が多かった。	今回の準備数より多めに準備しておく。	

	体験の部の途中から来た遅刻者の対応（木工の作り方を最初から説明する、遅れた分だけ制作を続けようとするため片付けができない等）に手間取り、もりの案内人も遅刻者に付きっきりとなった。	遅刻者の対応をするスタッフを余分に配置する。各テーブル担当者の役割を整理する。テーブルごとの人数を、体験の内容に合わせて再考する。
シンポジウム全体の運営管理	成 果	
	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでの林業関係者向けから子ども・一般向けに伝えることの意義を改めて感じられる内容となった。 ・アンケート結果より、親自身も学ぶことがあるなど福島以外の地域では福島のことを日常の中で忘れていているという実態があるため、正確な情報を伝えることは意味があり、本シンポジウムが情報・知識等を広げる機会になっている。今後も継続して普及啓発を行っていく必要がある。 ・福島会場を経て改善等を行ったことで、よりスムーズな進行となった。 	
	問題点	改善方法案
	応募者多数のため抽選となったが、抽選結果を連絡してから当日までのキャンセルが想定よりも多く（36件：当選連絡をした者の42%）、特に事前連絡無しの当日キャンセル（21件 25%）・遅刻（15件：参加実績の31%）が非常に多かった。	事前案内の時点でキャンセル等について強めに注意喚起する等、対策する。
	全体を通して遅刻者が想定より多く、対応予定になかったスタッフも急遽対応に当たることになった。	遅刻者の対応をするスタッフを余分に配置しておく必要がある。
<ul style="list-style-type: none"> ・200名規模で同時に体験型の内容を行う場合、経験がないスタッフではスムーズに対応できない。 ・当日だけサポートに入るスタッフに、自身の役割や動き方が分からず戸惑う者がいた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・事前の説明をもっと丁寧に行い、打合せを可能な限り密に行う。 ・当日リハーサルを入念に行う。 	

6)小括(福島会場、東京会場)

シンポジウムの実施状況、シンポジウム実施後のミーティング、参加者アンケートの結果・考察、企画・運営改善等から小括した。

①プログラムの企画内容について

ア シンポジウム全体

- ・両会場とも、次世代を担う若年層（子ども及びその保護者も含む）が、まずは福島の森・木・林産物の魅力や現状を知ること、さらに、福島県の森林・林業再生に貢献する何らかの行動に繋がることを目指した。参加者の様子、アンケートの結果では、「福島の森林等の現状の理解促進」については、子ども・保護者共に理解度も高く、またプログラム全体を通して満足度も非常に高かった。両会場共に、体験と学びを通して、森の恵みを楽しみながら現状を理解するという、狙い通りの成果を得た。これは、今年度初めて子ども向けに実施することとなり、子どもに理解ができるような配付・投影資料の作成、飽きさせないプログラムを作成したことが大きい。配布・投影資料を作成した講師は、対象者の反応を丁寧に想定しながら検討したことによって子どもたちの理解度を高める資料の作成に繋がった。東京会場では、学びの部の内容についての理解度は子どもが低い結果であったが、福島の森に行ってみたいなど行動に繋がるコメントが子どもと保護者共に多くみられたことから、シンポジウムの開催が、「森林・林業の再生に貢献する行動」に繋がるきっかけとなったと考えられる。
- ・両会場共通の課題として、対象とする子どもの年齢層に見合ったプログラムの時間配分があり、学びの部の時間は長すぎないようにする（飽きさせない）、体験の部は今年度設定の30分よりは長くすることが望ましく、シンポジウム全体の時間を含め、調整する必要がある。

イ アンケート結果から

- ・アンケートは満足度等を三段階で集計し（満足度：1.満足、2.どちらかという満足、3.不満）、参加者全体としては、福島会場での各コマの満足度の1と2の割合は、学びの部「福島の森のハカセになろう！」97%、遊びの部93%、体験の部「木で作ろう～クリスマスのオリジナルオーナメント～（以下、木工と記載）」と「収穫しよう～しいたけ&なめこの不思議～（以下、キノコ収穫と記載）」各100%と非常に満足度の高い結果となった。森林中の放射線量やキノコ出荷制限についての理解度も、1と2で92%と高い結果だった。
- ・同様に、東京会場での各コマの1と2の割合は、学びの部97%、遊びの部96%、体験の部（木工）100%、体験の部（キノコ収穫）98%と、福島会場同様高い結果だった。森林中の放射線量やキノコ出荷制限についての理解度も、1と2で90%と高く、東京会場のみ設問「福島を応援する気持ちになったか」については、89%が「思う」と回答した。
- ・アンケートの集計・考察は、保護者と子ども、さらに子どもは10歳未満と10代に分けて分析を行った。以下は、子どもについて述べる。学びの部は、10代の満足度1と2の回答が100%（福島・東京）に対し、10歳未満は91%（福島）・98%（東京）と若干低く、両会場とも10代からの3の回答はなかった。小学校中学年以上を想定した講義内容のため、10歳未満が理解するにはやや難しい内容だったことが示された結果となった。遊びの部は、1と2の回答が福島会場・東京会場の10代45%～53%、10歳未満78%と、10歳未満の方が満足度が高く、内容が低年齢層向けだったことがうかがえる。体験の部（木工）は、福島会場と東京会場で異なる結果となり、福島会場は1の回答で10代90%、10歳未満94%で、10歳未満の方がやや満足度が高いが、東京会場は10代100%、10歳未満92%で、10代の方が満足度が高かった。制作内容は両会場同じであるものの、都市部の子どもは木工を経験する機会が少なく、新鮮な体験だったことが東京会場での高評価に繋がったと推察

される。

- ・森林中の放射線量やキノコ出荷制限についての年代別の理解度は、福島会場が1の回答で10代71%、10歳未満50%で、対象年齢に満たない子どもには若干難解だったものの想定した対象年齢層にはしっかりと理解が促されたと考えられる。10代は学校で過去に授業等で学ぶ機会があり知識があったことで、本シンポジウムが復習的な位置づけとなり理解度が高いと推察される。一方、東京会場は、1の回答は10代50%、10歳未満45%で、年代別の大きな差はみられず、福島会場の子どもよりも理解度は大きく下がった。理解度が低かった理由としては、放射線教育として「放射線副読本」が全国の小・中・高等学校に配布されているもののそれが十分に活用されていない実態があること、森林やキノコが身近な存在ではないことから理解が進みにくいことが考えられる。
- ・保護者の結果をみると、満足度1と2の回答が、学びの部100%（福島）・95%（東京）、遊びの部90%（福島）・94%（東京）、体験の部（木工）100%（福島・東京）、体験の部（キノコ収穫）100%（福島・東京）、森林中の放射線量やキノコ出荷制限等についての理解度1と2の回答が100%（福島）・97%（東京）となり、大きな差はなくいずれも高い満足度及び理解度となり、子どもが楽しめる内容であっても大人が物足りない等の意見はなかった。
- ・東京会場のみ設問「福島を応援したい気持ちになったか」は、1の回答（思う）が10歳未満86%、10代70%、保護者97%となった。「森に遊びに行ってみたくと思った（子）」「まだ不安に思うことがあったが、今日を機会にもっと福島に出かけてみたくなった（保護者）」といった、福島を応援する気持ちの変化、家族でキャンプへ行こうと思う等の具体的な行動を記すコメントが多数あり、本シンポジウムが森林・林業の再生に貢献する行動に繋がるきっかけとなったことがうかがえた。

②広報対応及び情報共有について

- ・昨年度に引き続き、広報手法の改善・拡充等を行った。結果として、増員に繋がったと考えられる方法としては以下が挙げられる。
 - *郡山市・港区の全小学校へチラシ配布：来場者数が最も多い広報手法だった（福島：参加実績全体の55%、東京：参加実績全体の68%）。
 - *親子向けイベント情報サイト「いこーよ」へ掲載：本シンポジウムの対象層かつイベント情報を求めている層に対し、ピンポイントで告知が可能となった（両会場共通）。
 - *「福島民報」「福島民友」「福島建設工業新聞」の3社に記事掲載依頼：事前告知が掲載され、県内の購読者に情報が行き渡った（福島会場）。
 - *子ども環境情報誌「エコチル」への記事掲載：事前告知が掲載され、配布区内の小学校に情報が行き渡った（東京会場）。
- ・当日の取材は、福島会場は河北新報、福島民友、福島民報、福島建設工業新聞、東京会場は日刊木材新聞、グリーン・パワーの記者が来場し、後日、紙面およびWEBニュースとして取り上げられ、子どもたちが実験や体験を楽しむ様子の写真やコメントとともに、「森林内の放射性物質等についての講義を聞き理解を深めた」とシンポジウムの内容が紹介された。
- ・他方、東京会場では森林・林業関連の専門誌のみの取材であり、本事業の普及効果をさらに高めるために、広く一般向けのメディアに取り上げてもらうことも重要である。一般の

メディアに取材してもらえそうなプログラム内容を検討・実施するなど、引き続き広報に取り組んでいく。

- ・実施後の情報共有として、林野庁のウェブサイトでシンポジウムの概要報告を掲載した。

③シンポジウム当日の運営・発表状況について

- ・両会場とも、司会、講師・関係者、事務局、林野庁と、緊密な事前打合せ及び当日開始前のリハーサル等で詳細確認をしながら臨機応変に対応したことで、来場者からの不満の声も少なく（アンケート結果より）、時間通りのスムーズな運営となった。
- ・両会場とも、終了後はミーティングを実施し、参加者のアンケートを見ながら、改善点や感想を出し合い共有した。このことにより、福島会場での問題点を東京会場で改善することが可能となった。
- ・両会場とも、アンケートの満足度や理解度の高さやコメントでの登壇者に対する高い評価から、子ども向けイベント等の経験が豊富にあり、対象の年齢層へ分かりやすく「伝える力」のある登壇者が選定されていたと考えられる。学びの部では、実験等を用いて参加型の講義としたことで子どもたちが興味を持って熱心に聞く様子がみられた。体験の部も楽しんでいる様子がみられた。全体を通して講師への鋭い質問、素直な問いが子どもから活発に出ており、質問は、講師の話をも十分に理解したために発せられたものと推察された。
- ・課題として、親子向けに200名規模で同内容のシンポジウムを行う場合の適切な会場選定、各プログラムの時間配分、各班の参加者の人数調整とスタッフの配置・役割分担等、準備・運営面での改善が必要である。

④その他

- ・今年度の実施成果から、全体を通して楽しめる要素があり、体験を伴う「学び」が、子どもだけではなく保護者にも有効であることが実証された。昨年までの5年間も、関係者だけでなく一般市民も含めた参加を想定して企画していたが、参加者の大半は林業関係者であり、一般市民への普及啓発が課題であった。あわせて、「風評払拭・リスクコミュニケーション強化戦略（復興庁）」の中で、伝えるべき対象として「児童生徒及び教師等教育関係者」が一番上位に挙げられているように、次世代を担う子ども達とその保護者に、福島の森の実情を伝え、理解を促進し、更に一歩進み、福島県の森林・林業再生に貢献する何らかの行動を起こす応援団を増やしていくことは、今後も重要な課題になる。
- ・木材や特用林産物等の森の恵みの魅力は、五感を通じて訴えかけることができるため、木造の会場の使用（視覚・嗅覚）や、試食（嗅覚・味覚）等、魅力的なプログラムを柔軟な発想で検討する必要がある。
- ・放射性物質の現状等について、学習する機会や情報量が少ないと予想される福島県外の対象者には、より丁寧な説明が必要になることに留意しながら、本年度のシンポジウムの年代別理解度のアンケート結果において、小学校中学年程度を想定した「学びの部」の講義は10歳未満の理解度が10代よりも低かったことから、主な対象者の年齢を絞った普及も必要になると考えられる。
- ・広報手法については、広く一般のメディアに取り上げてもらえるよう、魅力的なプログラムの企画とすることはもちろんのこと、今年度の成果を分かりやすくPRしながら粘り強く取材を依頼していくことが必要になる。